# 千観の祈り

ロバート・F・ローズ
（大谷大学）

アメリカの宗教学者であるS・ギル（Sam Gill）教授は「祈り」を「人間と神聖な存在や精神的存在とのコミュニケーション」（human communication with divine and spiritual entities）と説明している。[1] 日本の各種辞典をみても、祈りは「神仏に請い願うこと」、[2]「広義において人間と神との内面的交通、生ける人格的接触、対話」、[3] あるいは「神と信仰者との対話」[4] などと、同様の定義が示されている。しかし一言で祈りといっても、それは様々な宗教的行為を含んでいることはいうまでもない。『キリスト教大事典』によると、キリスト教における祈りの概念のなかには賛美（praise）・感謝（thanksgivings）・悔い改め（penitence）・祈願（petition）・執成（intercession）などが含まれ、[5] ギルによると仏教の祈りのなかには瞑想的称名（meditational recitation）・経典の読誦（scriptural recitation）・真言（mantra）・菩薩の誓願（bodhisattva vows）などをも含めることができる。[6] また「祈り」をより広い意味で「人間の不安や期待に対する宗教的解決をもたらそうとする願いや行為」[7] と了解することもできる。

以上のように「祈り」の内容は多岐にわたるが、本論では「祈り」を広義に捉え、平安時代に生きた天台宗の千観（九一八―九八三）が著した『十願発心記』に焦点を当て、そのなかに見られる「十願」を取り上げ、千観の考えた

「祈り」とはどのようなものであったのかを考察する。[8]

## 一

十世紀の半ばごろから、比叡山では天台宗の教学体系に基づいた独自の浄土教の言説（discourse）が形成された。これがいわゆる「叡山浄土教」であるが、その形成に重要な役割を果たしたのが千観である。『阿弥陀新十疑』の著者である禅瑜（九〇九―九九〇）や『極楽浄土九品往生義』の作者とされる良源（九一二―九八五）などの同時代の僧侶とともに、千観は天台教学の立場から浄土教の言説や儀礼を構築し、その普及に努めた。そして叡山浄土教は良源の弟子である源信（九四二―一〇一七）が寛和元年（九八五年）に完成した『往生要集』によって大成されたことは周知の通りである。

佐藤哲英博士の研究によると、千観についての別伝は一つもないが、その生涯についての簡単な記述は平安時代に『日本往生極楽記』（以下『極楽記』と略す）から江戸時代の『本朝高僧伝』に至る十四種の伝記集や説話集に見られる。[9] それらのなかで、慶滋保胤によって著された『極楽記』が最古の伝記である。『極楽記』は永観元年（九八三年）から寛和元年（九八五）のあいだに著されたと推定されているが、[10] それは千観入滅の直後ないし数年内のことである。そのため『極楽記』の千観伝は、かなり信頼のおける伝記であるといえよう。ただし、この伝記は極めて簡略であり、またその多くの部分は千観誕生にまつわる奇瑞や入滅に関する霊瑞譚で占められている。

『極楽記』には千観の俗姓は橘氏であったと簡略に述べているだけであるが、[11]『尊卑分脈』には千観の父を相模守の橘敏貞としている。[12]『極楽記』には、その母が子供を授かるように観音菩薩に祈り、蓮華一茎を得る夢を見て懐妊

し、千観を生んだという霊瑞譚が載せられている。千観は若くして園城寺に入り、運昭について天台僧となり、さらに行誉から密教を学んだ。やがて内供奉十禅師に補任され、そのため「千観内奉」と呼ばれるようになる。しかし、少なくとも応和二年（九六二）には箕面の観音院に隠遁した。鴨長明の『発心集』などには千観が空也に後世か助かる道を問うたところ、「いかにも身をすててこそ」と教えられ、遁世籠居したという有名な話が載せられているが、これは史実として認められないというのが、今日の一般的見解である。箕面へ隠遁した数年後には摂津の金龍寺に移り住み、そこで入滅した。『極楽記』には、千観の入寂について次のような逸話がみられる。つまり権中納言敦忠の第一の女子は久しく千観に師事していたが、千観は、命終後必ず夢に現われて、生まれるところを彼女に告げると約束していた。そして入滅していくばくも経たないとき、千観が蓮華に乗り生前に著した『阿弥陀和讃』を唱えながら西に旅立つ夢を見た。これは千観が浄土に往生したことの証として、ここに語られていることはいうまでもない。

## 二

さて、『極楽記』には、千観が「十願を発して群生を導けり」[13]とあるが、これは千観が浄土往生を求めて十箇条からなる誓願を発し、それをもって衆生を教化したことを示している。これら十願を書きとどめ、それらについて自ら注釈を施したのが、先に挙げた『十願発心記』[14]である。そのなかで千観は天台宗の立場から、一切衆生には仏性が具わっており、そのために最終的には皆成仏することを論じている。さらに仏果を得るためには菩薩行を修することが不可欠であるという大乗仏教の基本的姿勢を継承し、在家者であっても速やかに菩提心を起こす必要があることを繰り返し強調している。

しかし千観によると、菩薩行を修することは末世の凡夫には甚だ困難なことである。では末世に生きる凡夫は、仏果を得るために如何なる行を修すればよいのであろうか。この問いに対して千観は、先ず阿弥陀仏の願力に乗じて[15]浄土に往生し、そこで無生法忍を得て[16]、そのうえで十方衆生を済度する菩薩行を自在に行うべきであると説いている。このように千観は天台僧として菩薩の修行を重視しながらも、末世の凡夫が菩薩行を効果的に行うためには、浄土に往生したうえでそれを行わなければならないと主張しているのである。

このような立場から、千観も自ら菩提心を発し、その具体的内容として十願を示しているのである。この十願を説明するに当たり、千観は「我れ今この身に菩提心を発して、仏法を興隆し、生界を利益せんと欲す[17]」と述べ、これらの願は仏法を興隆し、衆生を利益することが目的であると説いているのである。

まず第一願で、千観は臨終の時に阿弥陀仏の来迎を蒙って、浄土に往生することを誓っている。

第一の願にいわく、今生に普ねく一代の教を捜りて具さに如来権実の道を知り、念々に漸く六根の罪垢を浄め、現身に必ず障外の境を縁じ、臨終の時身心安楽にして、かの弥陀の来迎を蒙って、上品の蓮台に往生せん。あにただ我れ一人この事あらんや。普ねく法界の一切衆生の命終の時に臨み、七日以前に預め時至ることを知りて、心に顚倒を離れ、心は正念に住して善知識の教に遇い、十念を称して身心に諸の苦痛なく、同じく弥陀の浄土に生ぜしめん。[18]

ここでまず千観は、釈尊一代の教えを学び、権実の教えを見極めることを述べている。これは千観が自ら述べているように、「行は教より起こり、証は行より成ず。ゆえに菩薩の大行を起こさんと欲さば、須らく先ず仏教の旨を知る[19]」必要があるが、釈尊は衆生の機根に応じて権実の教えを説いたため、まずそれらを見極めなければ一切智地に到るこ

とは不可能であるからである。そのため千観は『十願発心記』で天台の四教・五時の教判を詳細に紹介し、天台宗の立場から如来権実の教えの特徴を究明している。さらに千観は「念々に漸く六根の罪垢を浄め、現身に必ず障外の境を縁じ」と述べているが、これは六根の清浄を得て、浄土（＝障外の境）を観ずることを往生の行とすることを語っているものである。

また第一願の後半では「あにただ我れ一人この事あらんや」と続けて、一切衆生も同様に浄土に往生するよう努めることが誓われている。これは千観が浄土往生を単に自利の行ではなく利他行として受け止めていたことを示すものであるが、そこでは臨終を迎える一切衆生に、その死の至る時を七日前にあらかじめ伝えることが約束されている。これは死に臨む衆生が必ず善知識の教に遇い、十念を称して浄土に往生できるようにするためであることは、いうまでもない。

## 三

第二願から第十願はすべて浄土の往生を遂げた後に、衆生済度のために行われる菩薩行について詳しく説いたものである。まず第二願では、浄土に往生した後、速やかに娑婆世界に還り有縁の衆生を済度し、弥勒菩薩が出現するまで釈尊の遺法を広めることが宣言されている。また第三願では、十方世界に諸仏が出現するとき、その仏前に行って供養し、仏法について質問することによって説法の機縁となり（つまり発起衆となり）衆生を利益することが述べられている。

次の第四と第五の願は、千観自身が示唆しているように、無仏の世界で仏法を興隆することを誓ったものである。[20]

弟四願は「十方世界の諸仏の滅後に、我が身みなその国にあって、かの正法を弘めて、仏の在世に等しからしめ、その像法を弘めて、正法に等しからしめ、末法を弘めて、像法に等しからしめ、遂に教法をして滅せしめず、まさに後仏の出世に継がん」[21]というものである。また第五願では十方恒沙の無仏世界に行き、仏教の灯明をかかげて衆生を教化するとされている。

次の弟六と弟七の二願は抜苦の願という性格をもっている。第六願では十方世界の三災劫のなかに行き衆生の苦を救うことが誓われている。三災劫とは刀・疫・飢（戦争・疫病・飢饉）の災害のことであるが、この願で千観は飢渇に苦しむ世界では長者となって衆生を救い、疫疾に悩む世界では大医王となって衆生を救い、戦争に苦しむ世界では慈悲の力をもって刀兵の瞋を除き衆生を救うと誓っている。また第七願では十方世界の三悪道のなかに行き、衆生の代りに苦を受けると述べ、同様に人天および三乗の苦も救うと説かれている。

千観は次の両願（第八・九願）を結縁の願と理解していたようであるが、第八願では父母・六親・朋友・知識・奴婢・僕従を初めとする、無始生死より菩提道場に至るまでのあいだ縁をもったすべての衆生の苦を抜き、将来自分（千観）が建立する浄土に往生させることを誓っている。さらに第九願では大乗の心を発する者、大乗の行を修する者、大乗の菩提を証する者、乃至世間・出世間の一切の善事を行う者のために不請の友となり、それぞれの目標を達成できるよう支援することが説かれている。このように千観はすべての衆生を浄土に導き、涅槃に至らしめようとしているのである。そして最後に第十願では一切の衆生の身を離れず、常に如来の教をもって引導し、一乗の道を究竟せしめることが述べられている。

以上、十願の内容について簡単に紹介してきたが、千観は『十願発心記』の最後に、これらの十願の具体的はたら

きについて興味深い説明を施している。それは十願を書き付けた願文自体が菩薩行を実践するという、極めて神秘的な説明である。この一節で千観は命終に臨むとき、右手にこの願文を握って命を終えることを誓い、さらに命終の後、この願文が如意珠となり、常に千観の右の掌中にあり、一切衆生のために仏事を作すことを約束しているのである。つまり貧困に悩む者のためには宝を雨のようにふらし、種々の病気や身心の苦痛に悩む人々には、それらからの解放をもたらす妙薬を与えると説いているのである。そして、先ずこのような世間の苦を除いた後、出世間の心を発させて、根機に応じて三乗の道を修し、一切智地に至らしめることが願われている。要するにここでは十願そのものが如意珠に変身し、一切衆生のために自在に仏事を作すことが説かれているのである。

これらの十願を通じてみられる千観の「祈り」とはどのようなものであろうか。それは一言でいうと、十方世界から苦を取り除き、仏法を興隆させ、一切衆生を仏果に導こうというものである。従来、菩薩行の性格は多く「上求菩提、下化衆生」と表現されてきたが、この「下化衆生」の内容として、千観は㈠衆生を苦から救うことと、㈡仏法を広めることにより衆生を解脱に導くことを挙げているといえよう。さらにこの二点の関係については、「興法は利生を本となし、利生は抜苦を先となす」[22]という言葉に端的に示されているように、仏法を広め、衆生を解脱に導くためには、まず衆生の苦悩を取り除き安楽を与える必要があると主張されている。そして、この「祈り」を実現するためには、先ず浄土に往生し、そこで無生法忍を得て、その後に十方世界に遊戯し、自在に菩薩行に勤めることを誓っている点に千観の十願の特徴があるといえよう。

ここで千観が衆生の「苦」を極めて具体的にイメージしていたように思われることを付け加えておきたい。弟六願では衆生の苦を戦争・疫病・飢餓という具体的なかたちで表現し、また最後に十願が如意珠となり仏事を行うと説く

なかでも、人間が経験する苦悩が具体的に列挙されている。このような具体的な人間の苦の姿に千観は心を痛ませ、それを救う道として浄土往生の教えに引かれていったのであろう。

## 四

次にギルがM・エリアーデ編集の Encyclopedia of Religion（一九八六年出版）に寄稿した「Prayer」の項目を参照しながら、従来あまり注目されてこなかった十願の宗教的行為としての一面を簡単に考えてみたい。「Prayer」の始めにギルは祈りの研究は残念ながら未発達でナイーブ（つまり方法論的に未熟）であることを指摘し、最近のコミュニケーション理論（communications theory）や記号論（semiotics）の成果を踏まえた祈りの比較研究が必要であることを訴えている。[23] さらに従来の祈りの研究は西洋の諸宗教（特にキリスト教）に強く影響されていることを強調し、より普遍的な立場からの考察が行われなければならないことも示唆している。

この項目のなかでギルは、(1)テキスト（text）としての祈り、(2)行為（act）としての祈り、(3)主題（subject）としての祈り、という三つの視点から祈りについて総括的に論じているが、そのなかで特に注目に値するのは「行為としての祈り」である。[24] ギルが指摘しているように、一般に祈りは言語的行為と理解されている。[25] 声を発して祈る場合と、心のなかで祈る場合の違いはあるが、基本的に両者とも言葉を用いて神々や聖なるもの（the sacred）とコミュニケーションを計る行為として考えられている。従来の研究は、このような視点を継承して、祈りの表現形式の分類やその内容の分析に終始していたように思われる。しかしギルによると、祈りには「行為遂行的」（performative）側面があり、それが非常に重要な意味を持っているのである。

周知のように、この用語はイギリスの哲学者J・L・オースティン（一九一一～一九六〇）の言語行為論（speech act theory）に由来するものである。オースティンは『言葉と行為』（*How to Do Things with Words*, 1960）のなかで「行為遂行的（performative）発言」に注目している。ここでいう「行為遂行的発言」とは、例えば「ここに、この船をクイーン・エリザベス号と命名いたします」のような発言のことで、当の行為を遂行するために発せられる言葉のことである。[26] 要するにオースティンによると、人は言葉を単に情報を伝達するだけでなく、船を命名したり、約束をしたり、誓いを立てたり、様々な行為を遂行するためにも用いるのであり、これも言葉の持つ重要な機能である。

ギルによると、従来の祈りに関する研究では、主として祈りの情報伝達的側面が強調されてきたが、それと同時に祈りの持つ行為遂行的発言としての側面にも注意しなければならないとされている。つまり祈りは人間の願いや要求を神々に伝える情報伝達的側面だけでなく、祈りを発したり、それを聞く人々に大きな変化をもたらす働きも持っているのである。ギルの言葉を借りるならば、人々は祈りを通じて何かを「言う」だけではなく、何かを「する」のである（not only say things... but they also do things）。[27] 例えば、キリスト教の儀式（ミサ）の一環として神の臨在を求める祈りが発せられるとき、その祈りによって神が実際に臨在している状況を作り出し（少なくともそのミサに参列している人々の心情を変化させ、神が臨在していると感覚を持たせ）、その場を儀式を行うためにふさわしい聖なる場へと変革させるのである。つまり祈るという行為によって、神の臨在を実現し、その場を聖なる空間へと変化させるのである。また懺悔の祈りは、犯した罪の内容を神に告白する情報伝達的側面とともに、罪を告白することによって自分の罪を悔いて神の許しを請う人間へと変革してゆく行為遂行的側面も持っている。[28]

このように、ギルは祈りの行為遂行的側面を特に取り上げて論じているが、それは千観の十願を考えるうえで大き

な示唆を与えてくれるものである。従来の研究では主として千観の往生観や浄土思想を解明するための素材として十願を取り上げてきたため、十願の持つ行為遂行的発言としての側面はあまり論じられてこなかった。しかし、千観にとって十願の持つ宗教的意義を考えるうえで、この側面を見逃すことはできない。資料が不十分なため具体的なことは分からないが、十願はなんらかの仏教儀礼の一環として、千観によって仏前に声を発して読み上げられたと推測される。いうまでもなく、千観の十願は彼の発心の内容を具体的に示したものであるから、それらは発心後にどのような菩薩行を行い、どのような理想の世界を作り上げて行くかを宣言するという側面をもっている。しかし同時に十願を読み上げるという行為は、千観を十願に沿って理想の世界を実現しようと努力する菩薩へと転換する行為でもあるのである。換言すれば、十願は千観の菩薩行の内容を明示する言葉であるとともに、彼の宗教的主体に変革をもたらす言葉でもあるのである。

以上のように、千観の「十願」をギルの論旨に照らし合わせることによって、従来あまり強調されなかった十願の行為遂行的側面について考えてみた。このような比較研究を通じて仏教をより広い視野から捉え直すことは、今後ますます重要な課題となるであろう。しかし比較を通じて類似点を拾いだすだけでは不十分である。すでにギルが指摘したように、仏教には瞑想的称名や菩薩の誓願など、その機能からすると祈りと極めて類似した宗教的行為が多々見られる。しかし、もし祈りを人間と聖なるものとのコミュニケーションと規定するならば、神を立てない仏教（特に上座部仏教など）では、果たして「祈り」が成立するか、という問題がある。そこで仏教の「祈り的」宗教行為と有神的宗教の祈りとを、詳細に比較検討することにより、諸宗教にみられる祈りの本質と仏教の独自性との両面を明らかにすることが重要である。(29)

## 注

（1）Mircea Eliade ed., *Encyclopedia of Religion*.（New York: Macmillan, 1986）vol. 11, p. 489.

（2）『日本国語大辞典』小学館、一九七三、第二巻、三一九頁。

（3）小口・堀監修『宗教学辞典』東京大学出版会、一九七三、三一頁。

（4）『キリスト教大事典』教文館、一九六三、八七頁。

（5）『キリスト教大事典』、八七頁。

（6）Eliade ed., *Encyclopedia of Religion*, vol. 11, p. 489. ちなみに『岩波仏教辞典』では仏教の祈りの内容として懺悔・感謝・救済・神仏との合一（神秘体験）・願望の達成（祈願）・呪術的行為（祈禱）などを挙げている。中村元他編『岩波仏教辞典』岩波書店、一九八九、四三～四。

（7）これは「日本仏教学会二〇〇四年度学術大会共同研究テーマ趣旨」に見られる一文により、私なりに要約したものである。

（8）千観についての先行研究は決して多くない。そのなかで主なものとしては、次のようなものを挙げることができる。

㈠佐藤哲英「千観内供の研究」、『宗学院論輯』第十巻、一九三九、一～六五頁。

㈡戸松憲千代「『十願発心記』にみらるる千観内供の浄土教」、『大谷学報』二十巻二号、一九三九、一0二～一四二頁。

㈢梅林久高「千観の『十願発心記』における浄土思想」、『真宗学研究』二一号、一九七五、五二～六二頁。

㈣波多恵美子「千観の浄土教思想　上・下」、『仏教史研究』、上は七号、一九七三、二～一八頁、下は八号、一九七五、四五～六二頁。

㈤佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、一九七九）、研究編、六六～七八。

㈥奈良弘元「千観の往生思想」、壬生台舜博士頌寿記念『仏教の歴史と思想』大蔵出版、一九八五（後に奈良弘元著『初期叡山浄土教の研究』春秋社、二〇〇二に再録）。

㈦ロバート・F・ローズ、「千観の浄土思想―『十願発心記』における菩薩行の構造を中心に―」、『仏教学セミナー』七九号、二〇〇四、一～一八頁。

（9）千観の生涯と著作については佐藤哲英「千観内供の研究」によった。

（10）『極楽記』の成立年代については井上光貞・大曽根章介編『往生伝・法華験記』（日本思想体系七、岩波書店、一九七四）、七一二頁参照。『極楽記』千観伝は井上・大曽根編『往生伝・法華験記』二九～三〇頁に収められている。
（11）井上・大曽根編『往生伝・法華験記』二九頁。
（12）佐藤「千観内供の研究」一〇頁。
（13）井上・大曽根編『往生伝・法華験記』二九頁。
（14）『十願発心記』のテキストは、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』資料編、一五九～二二〇頁にある。
（15）佐藤『叡山浄土教の研究』資料編、二一九頁a。
（16）佐藤『叡山浄土教の研究』資料編、二〇七頁b。
（17）佐藤『叡山浄土教の研究』資料編、二一九頁a。
（18）佐藤『叡山浄土教の研究』資料編、一九五頁a～b。
（19）佐藤『叡山浄土教の研究』資料編、一九五頁b。
（20）千観は第四願～第九願の性格について、次のように解説している。「第四・第五の願は同じく興法にあり、第六・第七の願は同じく抜苦にあり、第八・第九の願は同じく結縁にあり。」佐藤『叡山浄土教の研究』資料編、二一八頁b～九頁a。
（21）佐藤『叡山浄土教の研究』資料編、二〇九頁b。
（22）佐藤『叡山浄土教の研究』資料編、二一九頁b。
（23）Eliade ed., *Encyclopedia of Religion*, vol. 11, p. 489.
（24）ちなみに「テキストとしての祈り」のなかでは、祈りが多くの場合、定型化した「テキスト」として各宗教のなかに伝承されている点が強調されている。西洋の宗教研究の伝統では、表現が整えられて固定化された形で伝承される祈りでは人間の純粋な宗教心を表現することはできず、形に囚われない自発的に発せられた祈りこそが、真の祈りであると理解されてきた。しかしテキストとして固定化された祈りでも、人々の純粋な宗教的欲求を表明することができ、さらにそのような祈りは各宗教の伝統や世界観を維持し、後世に伝えるという極めて重要な役割も持っていることが指摘されている。さらに「主題としての祈り」のなかでは祈りが宗教言説の重要な「主題」、つまり宗教に関わる人々の議論

や思索の対象であることが強調されている。これをギルは「メタ祈り」（metaprayer）と呼んでいるが、ここでは祈りについて伝承されてきた解釈や教義を考察することによって、その宗教の原理や性格を把握することができると論じられている。

（25）最近では歌・踊り・生けにえや食べ物の供養などの非言語的行為も祈りに含まれると考えられているが、基本的には言葉を通じて行う行為であるとには違いない。Eliade ed., *Encyclopedia of Religion*, vol. 11, p. 491.

（26）『岩波比較思想辞典』岩波書店、一九九八、四五〇～一頁。

（27）Eliade ed., *Encyclopedia of Religion*, vol. 11, p. 490.

（28）Eliade ed., *Encyclopedia of Religion*, vol. 11, p. 490.

（29）Eliade ed., *Encyclopedia of Religion*, vol. 11, p. 491.